報告要旨

報告 1
「ダメットとウィトゲンシュタインの哲学的観点」
大谷弘（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）

現代イギリスの言語哲学者、マイケル・ダメットは意味論的実在論を攻撃し、反実在論の重要性を主張し続けている。ダメットに最も大きな影響を与えたのはフレーゲの哲学であろうが、彼はまたウィトゲンシュタインからも多くの着想を得ている。実際、ダメットとウィトゲンシュタインの主張には共通する部分が多い。特に後期のウィトゲンシュタインが実在論に批判的であったことは明らかであり、その限りでウィトゲンシュタインに反実在論的な傾向があることは間違いない。しかし、両者の哲学には相違もある。ダメットが意味の説明が体系的な意味の理論によりなされると主張するのに対しウィトゲンシュタインは体系的な哲学的説明を攻撃し続けた。本発表においてはこの両者の違いがどのような哲学的観点の違いを反映しているのかを探り、その違いが言語や意味といった概念に対するどのような理解のあり方の違いを生み出すのかを明らかにしたい。

報告 2
「アダム・スミスにおける道徳感情の不規則性」
島内明文（日本学術振興会特別研究員）

『道徳感情論』第 2 部第 3 篇「行為の功罪に関する人類の感情に対して偶然性が与える影響について」においてスミスは、道徳感情の「不規則性」(irregularity)を論じる。そこでスミスは、道徳的評価が行為の「意図」(intention)または「動機」(motive)に基づくとする「公正の原則」(equitable maxim)を提示する一方、現実の道徳的評価に際しては道徳感情が行為の「実際の帰結」(actual consequence)に基づいて発生しがちであることを指摘し、このことの意義について考察している。道徳的評価における帰結の位置づけという問題は、ハチスン、ヒュームも論じており、これをふまえてスミスは自らの議論を提示する。また、こうしたハチスン、ヒューム、スミスの考察は、感情論(sentimentalism)の立場から「道徳的運」(moral luck)とりわけ「帰結における運」(resultant luck)の問題を検討したものである。本報告では、ハチスンおよびヒュームの見解と対比し、また必要に応じて道徳的運に関する現代の議論も参照しつつ、道徳感情の不規則性に関するスミスの議論を検討する。